本棚

大沢真理　編著

『社会的経済が拓く未来

―危機の時代に「包摂する社会」を求めて―』

本書は，ヨーロッパにおける社会的経済の実践と政策的位置づけを参照しつつ，日本の政策を省察し，日本における社会的経済の現状と可能性を探ろうとしたもので，「第Ⅰ部　社会的経済の意義―戦略・質・量―」，「第Ⅱ部　日本の協同組合と協同労働」および「第Ⅲ部　労働への包摂と公共サービス」の３部からなっている。

第Ⅰ部の「第１章　社会的経済の戦略的意義」（大沢真理・東大社研教授）は，2000年代のヨーロッパ連合EUと日本の経済社会ガバナンスを対比することを通じて，社会的経済の戦略的意義を考察したものである。それを通じ，「包摂する社会」を実現するためには，日本では社会保障・税の一体改革と地域主権の確立が必要であり，さらに民主党政権のもとの「新しい公共」も一層の視野を広げるなかで整合的に追求されるべきことを指摘する。「第２章　社会的質と社会的経済の接合点」（福士正博・東経大経済学部教授）は，社会の構造的問題に由来する現在の社会的プレカリティ（社会的に強いられた不安定性，social precarity）の問題を論じ，それを克服する一つの方法として社会的経済を捉える。「第３章　日本の社会的経済の統計的把握に向けて」（栗本昭・生協総研理事）は，社会的経済セクターの統計的把握の意義を説き，海外における動向を紹介しつつ，わが国の現状と課題を抽出し，統計的把握に向けた課題を提起する。

第Ⅱ部の「第４章　日本の生活協同組合」（山口浩平・生協総研研究員）及び「第５章　日本の農業協同組合（JA）」（櫻井勇・JC総研主席研究員）は，それぞれの協同組合の取り組みのなかから社会的経済の担い手としての新たな可能性を検討している。「第６章　社会的経済における「協同労働」の展開と課題」（田中夏子・都留文大文学部教授）は，わが国おける「協同労働」の創出経過と展開，その特徴を抽出し，協同労働のもつ現代的な意味合いを論ずる。

第Ⅲ部の「第７章　障害者を労働へと包摂するとは」（米澤旦・学術振興会特別研究員）は，多元的である社会的排除の持つ特性を踏まえ，労働統合〔包摂〕型社会的企業による包摂アプローチもその多様性を理解することの重要性を説く。「第８章　イギリスの公共サービス改革と社会的企業」（今井貴子・成蹊大法学部准教授）は，イギリス労働党政権下の公共サービス改革のなかで，新たな役割を担うこととなった社会的企業における国家と社会的経済の関係をめぐる課題と可能性について，社会的企業の一つであるワイズ・グループの事例を通じて論ずる。

本書は，社会的経済の理論書ではない。全体を通ずる視点は，サブタイトルからも窺えるように「社会的包摂」である。それが必ずしも全ての論文を貫く形になっていない点は，社会的経済の有する多元的価値によるものであると考えたい。わが国において生活が保障され，参加の機会が確保された社会をどのように展望するかについて関心のある向きには，ぜひ一読を勧めるとともに，今後の研究・議論の輪の広がりに期待したい。

――ミネルヴァ書房　2011年6月

定価5,250円（税込）　257頁――

（農林中央金庫　JAバンク統括部　主監

明田　作・あけだ　つくる**）**

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/